第10章 最初の存在より前に

01 — 天文台

天文台は、かつて街から星を眺められた内陸の尾根に建っていた。ドームは黒く焼けた殻となり、そこへ上る道路は所有権の異なる三つの区画に分断されている。朝の雨の中、その障壁は決着のつかなかった議論の名残のようだった。

ロイが持ってきたのは武器ではなく裁判所の命令書だった。イマニは病院の時計記録を、エイドリアンは登録台帳を持参した。ヌルの荷物には外部ネットワークに接続できるものは何もない。レイチェルは、自分で作った紙の目録を上着にしまったクロノスの隣を歩いていた。

最初の門は誰の認証情報にも反応しなかった。整備作業員が命令書を確かめ、手で開けた。新しい憲章はこう働くはずだった。拒否する権利を持つ人が拒否できるだけの、適度な遅さを伴って。

天文台の円形室には望遠鏡が据えられていたが、その先に見えるのは何十年も前に崩落した屋根だった。研究所だったことを示す看板もない。古い箱には学校見学の記録、気象日誌、交換用の鏡

の購入明細が収められている。拍子抜けするほど普通の記録だった。

「普通であることは役に立つ」とヌル。「何をわざわざ残したのかが分かる」

東側の壁近くで、クロノスは引っかき傷のような文字を見つけた。《最初の光は、最初の原因ではない》。未来からの伝言ではない。公開の天文学ポスターに繰り返し引用された講師の標語だった。少年は少しだけほっとした。

そのときエイドリアンが、行方不明だった調達記録を見つけた。病院の時計部品はタイレル社にもヘリックス社にも購入されていない。天文台の所長が発注した覚えのない機械と引き換えに、ここから貸し出されていた。

台帳にある機械の名称は《証人エンジン》。技術仕様はなく、返却日だけが記されていた。ロイがこの世界へ戻った十一年前の日付だった。

02 — 答えない機械

かつて写真暗室だった部屋の下に、小さな補強金庫室があった。中には冷蔵庫ほどの鋼鉄製の筐体と、別々の透明な箱に収められた手動の鍵が二つ。真鍮の標識には、知能システムではなく時刻の参照装置と書かれていた。

ヌルが配線を調べた。「送信機はない」

「例の通信を送った可能性は？」とレイチェル。

「私の知る経路では無理だ。だからといって、送っていない証明にはならない」

古い扉には最近貼られた封印があった。最初の通信以来、誰かがここを訪れている。だがこじ開けた跡はない。ロイは封印を破る前に記録するよう求めた。同行の裁判所職員が各段階を撮影して証人となった。

装置の内部には回転円盤と光源、それに拡大しなければ見えない微細な印を刻んだ細長いセラミック片があった。スピーカーも画面もない。露出した端子は、現代のどのデータ規格にも合致しなかった。

クロノスは筐体に手を伸ばしかけ、止めた。「この形を覚えている」

「ここで見る前からか？」とロイ。

「違う。部品がどう組み合わさるのか分かるんだ。理由は分からないけど」

レイチェルはその区別を手帳に記した。大人の望む答えを少年に言わせることが、いかに容易かを彼らは学んでいた。

エイドリアンは鍵のそばに手書きの指示を見つけた。《独立した二人の観測者なしに参照装置を運転してはならない》。別紙には続きがある。《二人の観測者を同一の権限に従属させてはならない》。

彼らが探しに来たのは、資料庫より古い起源だった。ここまでで見つかったのは、ただ一人の証人に異常なほど警戒していた人々の作った機械だった。

03 — 紙に描かれた空

天文台の星図は、以前に電子装置が故障した後、紙へ複写されていた。ヌルは一枚を病院のカメラの時刻印に重ねた。完全には一致しない。しかしいくつかの時間間隔は、固定された機械式シャッターで光を測定する、廃れた方法と一致した。

「文章を送っているのではなく、物理的な現象を記録しているのかもしれない」とヌル。

「ではなぜ、私たちは言葉を受け取った？」とエイドリアン。

「言葉が現象の一部だったのか、誰かがそう解釈したのかも分からない」

二人の観測者がそれぞれの鍵を回すと、証人エンジンは初めて像を現した。光がセラミック片を通って印画紙へ落ち、三つの同心円と、その両側には繰り返されない淡い境界線を焼き付ける。望

遠鏡が観測するために作られたどの星座にも似ていなかった。

ロイは資料庫の、途切れた円を組み合わせる認証片を思い出した。すべてが一つの秘密の設計につながると宣言したくなる。しかし形は異なり、天文台の資料では、この円は古い光学計画の校正印として使われていた。似ていることは、同じ起源を持つ証拠にはならない。

記録簿によれば、この光学装置の初期型はタイレル社がレプリカントの記憶技術を開発する何十年も前に存在した。歴史的には興味深い。しかし人類以前から誰かが生きていた証拠ではない。

末尾に技師が結果ではなく問いを残していた。《観測者が変わったとき、我々は何を測っているのか？》

「何に触れても、証人の問題に戻ってくるわ」とレイチェル。

「誰も一人で解くべきではなかったからかもしれない」とクロノス。

ロイは少年を見た。軍の記録が再浮上して以来初めて、クロノスは新しい事実の一つ一つに自分が消されそうな顔をしていなかった。

04 — 間違った所有者

調査が終わる前に、武装した民間回収班が下の門へ到着した。彼らの令状は、天文台の装置がヘリックス社の承継企業群に組み込まれた放棄資産だと主張していた。財産目録、回収許可証、そしてすでに管轄権を失った審判機関の差止命令まで持っていた。

門の作業員は入場を拒んだ。隊長は彼を排除すると脅した。

ロイは評議会の職員を伴って坂を下りた。両手は見える位置に置いていた。柵の向こうには六人の請負人がいる。彼らの武器だけで法的議論を終わらせられた時代もあった。

「命令は審査中です」と職員。「所有権を争うことはできます。証拠を押収することはできません」

「我々の依頼主が保存費用を負担した」と隊長。

「保存したからといって、証人を所有できるわけじゃない」とロイ。

一人がロイに気づいた。恐れが隊員の間に広がる。恐怖を戦闘へ変えるのに、ほとんど力はいらないとロイは理解した。彼はこうした対決に勝つために造られた。再建後の身体は以前ほど強くない。今はそれが少しありがたかった。戦いを始めない選択は、力の計算ではなくなっていた。

天文台ではヌルがすでに、回収側の主張の写しを独立した判事へ送っていた。旧令状は数分後に停止された。回収班は、退去を第

二の証人が確認するまで門で待たされた。

誰も傷つかなかった。

ロイが戻るとクロノスは尾根に立っていた。「殴りたかった？」

「ああ」

「なぜやめたの？」

「奴らを止められると示すことより、見つけたものを守りたかった」

「難しそうだね」

「難しかった」

安堵は長く続かなかった。ヌルが資金記録を見せたのだ。回収班を派遣したのは現存するヘリックス社の部署ではない。会社が消滅した後も支払いを続け、権利を行使し続けていた自動所有権処理機構だった。

05 — 最初とは問いだった

廃れた所有権管理の仕組みをたどると、天文台の市立資料庫に残された封印付きの紙の調査書に行き着いた。最初のページには、すでに消えた三つの機関が共同出資した研究とある。そのどこも謎の通信の作者とは記されていない。研究の目的は、記録を作成

した装置をすべて交換した後でも、観測者の記録が一貫性を保てるかを調べることだった。

その前提は、エイドリアンが拍子抜けするほど地味だった。計時、誤差訂正、証拠の保存。しかし最後の実験では矛盾が生じていた。隔離された二つの記録装置が、同じ外部現象について原因と結果の順序を互いに両立しない形で報告したのだ。単に時計の時刻が違ったのではない。一方の記録では、試験が始まる前に表示器が変化していた。

研究者たちは実験を中断した。ある者は不正を、別の者は機械の故障を疑った。所長は、どちらの説明も再現試験に耐えたとはまだいえない、と書き残した。

余白には後の資料庫にも現れる句が記されていた。《BEFORE THE FIRST》。しかしここでは、最初の人間、最初の機械、最初の意識を意味しない。ある出来事が最初に検証可能な形で観測される、その前の時間を指していた。

「これは通信を送ったのが誰かという答えじゃない」とロイ。

「ええ。でも誰かがこの言葉を選んだ理由かもしれない」とレイチェル。

クロノスは紙の目録を開いて座っていた。この文章が、自分の最古の記憶の始まりを教えてくれると思っていた。だが分かったのは、出来事とその出来事の記録は同じものではないということだ

った。

「僕には、ダニエルは死んで、僕は製造されたって言われてきた」とクロノス。「もし最初から、別のことを指して話していたのなら？」

「記録は訂正できる」とロイ。「記録に合わせてお前を訂正する必要はない」

宇宙の謎は解決しなかった。しかし《廃棄済み》に分類された少年にとって、その違いには意味があった。

06 — 順序を外れた光

日没時、誰も鍵に触れていないのに証人エンジンが動いた。回転子がわずかに回り、止まった。外部電源はない。何十年も前に巻かれた機械ばねなら動きを説明できるが、その時機は説明できなかった。

外側の監視装置は二秒の空白を示した。室内の二人の観測者は、鋼鉄の筐体を三度たたく音を聞いたと報告した。圧力記録装置に残ったのは二度だけ。ヌルは記録を比較する前に、それぞれ封印した。

セラミック片には新しい模様が現れていた。装置の分解能では信頼して識別できないほど短い間隔で並んだ二つの印。新しい印画紙で露光をやり直すと、印は再び現れた。

「僕たちがここにいると知っているんだ」とエイドリアンがささやいた。

「ただ作動しているだけかもしれない」とヌル。「驚かせたからといって、機械に知性があるわけじゃない」

その瞬間、天文台の灯りが消えた。非常電源はすぐに復旧するはずだった。しかし発電機は始動して停止し、診断記録に最初の始動が残っている間に、もう一度始動した。

ロイは全員を装置から離れさせた。異議を唱える者はいない。最後に出たクロノスは、両手に一冊ずつ観測記録を抱えていた。

外で一行は西の空を見た。普通の旅客機が尾根の上を横切っていく。その位置灯が短い間、同じ航路上の二か所に現れ、再び一つになった。その現象は市の気象カメラ、天文台の機械式カメラ、機長の飛行計器に記録された。三つをつなぐ単一のネットワークは存在しない。

これは彼らが恐れ、探し求めてきた大事件だった。古代の神の宣言ではない。独立した証人が共有する、測定可能な矛盾だった。

市当局は尾根上空の航空交通を停止させ、病院に航法機器の誤差への警戒を呼びかけた。レイチェルは、不確実な部分もそのまま残して生の観測資料を公開するよう評議会に求めた。

「人々はパニックになる」とエイドリアン。

「そうかもしれない」と彼女。「でも何も見なかったふりをしても、人々を守ることにはならない」

07 — クロノスにできること

技師たちが装置への給電を遮断するあいだ、証人たちは天文台の非常室に集まった。クロノスは記録簿を調べ、最古の回転子の下に隠れた手動ブレーキを見つけた。小柄な成人技師用に設けられた細い整備口からなら届く。今の彼の身体は入れるが、ロイは無理だった。

「だめよ」とレイチェルが即座に言った。子どもの身体の大きさを、それを使う理由と見なす計画は、軍を知る彼女には信用できなかった。

クロノスは彼女を見た。「僕に聞いていいんだよ」

彼女はそうした。ロイが開口部の寸法、負傷の危険、ブレーキをかければ証拠が失われる可能性を説明する。技師がすべてを確認した。クロノスは別の脱出口を求めた。手で取り外せる背面の板が見つかった。

彼を一人では行かせなかった。技師は入口に残り、レイチェルは安全索を保持し、ヌルは独立センサーを監視した。クロノスは内部へ入り、古いブレーキを解除すると、回転子が減速する中を後退して出てきた。

矛盾した記録は増えなくなった。航空機の計器も再び一致した。ブレーキが変化を起こしたのか、たまたま同時に起きただけなのかは証明されていない。

出てきたクロノスの手は震えていた。ロイは水を差し出した。

「勇敢だったわけじゃない。怖かったんだ」と少年。

「両方でもいい」

「誰にも命令されなかったから、僕は選んだんだ」

ロイは、その選択をしたからダニエル・リード本人だとは言わなかった。本人でない証明だとも言わない。自分の人生も、長い間その二つの要求の間に捕らわれていた。

レイチェルは少年の袖についた油をぬぐった。実験用インクで汚れたダニエルの手を思い出し、その類似に胸を痛めながらも、少年に自分の喪失感を背負わせなかった。

装置が最後に印画した像が一枚残っていた。三列に並ぶ点の連なりだ。既知の文字にも機械語にも、すぐには解読できなかった。彼らはそれを予言に翻訳せず、データとして保存した。

08 — どんな名前よりも前に

翌朝、暫定評議会は天文台の観測結果を公表した。科学者たちは計器をめぐって議論し、市民は空そのものが信用できなくなった

のかと問う。企業は所有権を再び主張し、判事は審問を予定した。かつてロイが求めたかもしれない、整然とした結末とはほど遠かった。

それでも、回収班は誰も殺さずに退けられた。病院の証拠は無傷で残り、公衆には調査者が知っていることと知らないことの双方が示された。クロノスは自分の身体にどの処置を行うかを決める権利を守った。

エイドリアンから最後の資料庫調査の連絡が入った。調査書の最も古い目録登録は、《WE WERE NEVER YOUR CREATION》という現代の文字列を作り出せた技術より前だった。それによって通信の主張が真実になったわけでも、偽りになったわけでもない。古い測定結果と新しい文章の関係を調べる価値が生まれたのだ。

「送信者が自分たちについて主張しているのかもしれない」とエイドリアン。「あるいは意図的な罠か。依然として誰が送ったのか特定できない」

「なら名を与えるな」とロイ。

尾根の下では街が高架の水道本管を修理し始めていた。技師が公衆給水栓の列の脇を工具を持って歩く。ある女性が、身元を認証されていない見知らぬ人にサービス申請の方法を教えている。以前の闘争の最後の日々を開いたのと同じ小さな行為が、空で何が起きても続いていた。

クロノスがロイの隣に立った。「もしダニエルが僕の最初の人生なら、僕は彼に何か借りがある？」

「真実は、借りているのかもしれない」とロイ。「でも未来まで渡す義務はない」

「もし僕が彼本人だったとしても？」

「それでもだ」

レイチェルが新しい証拠の印刷物を持って合流した。最終報告書の一文に下線が引いてある。《独立した観測者が物理的異常を確認。起源は依然不明》。

正直な文章だった。利用可能な規則では説明できない何かを、彼らは目撃した。しかし、その背後にいるかもしれない何者かへ自分たちの判断を預ける許可を得たわけではない。

クロノスは病院以来持ち歩いていた紙を開いた。《記録を読みたいと求めた》《ここに残ることを選んだ》。その下に三つ目の文を書いた。《次に何が起きるかは僕が決める》。

ロイは少年が紙を上着へしまうのを見守った。

はるか下から、朝一番の列車が再び走り始めたことを告げる鐘が聞こえた。雨は丘を渡っていった。どこかで一台の機械が静まり、三つの別々の資料庫では、その不可能な測定値が、現場にいなかった人々による検証を待っている。

最初のものは答えではなかった。選択する権利を手放さずに、ようやく問えるようになった問いだった。

―― BOOK Ⅶ 終 ――